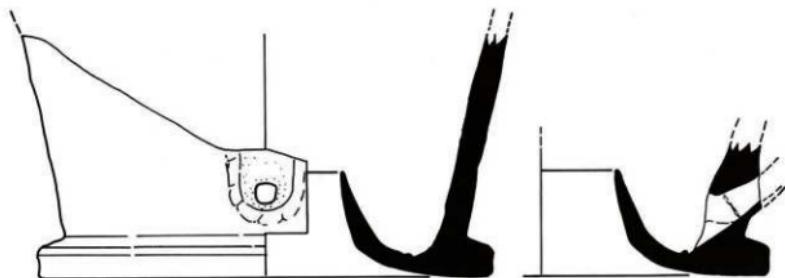


小杉町黒河尺目遺跡発掘調査概要



1992年3月

富山県小杉町教育委員会

例　　言

1、本書は、有限会社北川石油産業のガソリンスタンド建設に伴う造成に先立って実施した富山県射水郡小杉町尺目2,030番地外に所在する黒河尺目遺跡の発掘調査概要である。

2、調査は、小杉町教育委員会が主体となって行なった。

3、それぞれの調査期間、発掘面積、担当者は次ぎのとおりである。

試掘調査：平成2年9月28日 延べ1日、発掘面積 約 23m² 上野 章

　　：平成2年12月22日 延べ1日、発掘面積 約 167m² 上野 章

木調査：平成2年10月6日～10月23日 延べ6日、発掘面積 約 246m² 上野 章・原田義範

　　：平成3年6月12日～8月12日 延べ41日、発掘面積 約 1,000m² 上野 章

4、調査事務局は小杉町教育委員会に置き、平成2年から平成3年6月までは事務を主任金山秀彰が担当し、社会教育課長荒川秀次が総括し、平成3年7月からは生涯学習課長盛田寿子が総括した。

5、調査の実施にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから指導・協力をいただいた。

6、遺物整理は、各調査担当者が行い、本書の作成は平成2年度を上野・原田が行い、平成3年度を上野があたった。

7、遺構番号の頭の分類番号は次のとおりである。

S B : 建物、S D : 溝、S K : 穴、P : 柱穴・柱穴状ピット

目　　次

挿　　図

I 遺跡と周辺の遺跡	1	第1図 位置と周辺の遺跡	1
II 調査に至るまで	1	第2図 遺跡と発掘区	2
1. 調査の経緯	1	第3図 遺構全体図	3
2. 平成2年度の調査	2	第4図 挖立柱建物・穴遺構図	4
3. 平成3年度の調査	2	第5図 穴・溝遺構図	5
III 調査の概要	3	第6図 出土遺物	6
1. 平成2年度の調査	3	第7図 発掘区割図	7
(1) 遺構	3	第8図 検出遺構図(折込み)	
(2) 遺物	5	第9図 挖立柱建物遺構図	9
(3) 小結	7	第10図 挖立柱建物遺構図	10
2. 平成3年度の調査	7	第11図 挖立柱建物遺構図	11
(1) 調査の方法	7	第12図 溝・穴遺構図	13
(2) 遺構	7	第13図 穴遺構図	14
(3) 遺物	15	第14図 出土遺物	17
IV まとめ	22	第15図 出土遺物	18
1. 遺物について	22	第16図 出土遺物	19
(1) 奈良時代	22	第17図 出土遺物	20
(2) 平安時代から鎌倉時代	23	第18図 出土遺物	21
2. 遺構について	23	第19図 奈良・平安時代の土器	22
図版		第20図 遺跡の検出遺構	23

I. 遺跡と周辺の遺跡

黒河尺目遺跡は、射水郡小杉町尺目2,030番地外に所在する。この地域は、県西部にある射水丘陵の北端に位置し平野と丘陵が接する標高約10mの微高地にある。

丘陵一帯は、新生代第三紀の泥岩・砂岩層によって構成される青井谷泥岩層からなり、その上部に呉羽山礫層が点在している。呉羽山礫層の南端と射水丘陵との間の凹所には鍛治川を中心とする扇形の地形があり、神通川の扇状地性堆積物からその旧扇状地とされている。この旧扇状地面にあたる遺跡周辺では、黒河・塚越などの微高地が畠地として利用されている〔北林1959〕。

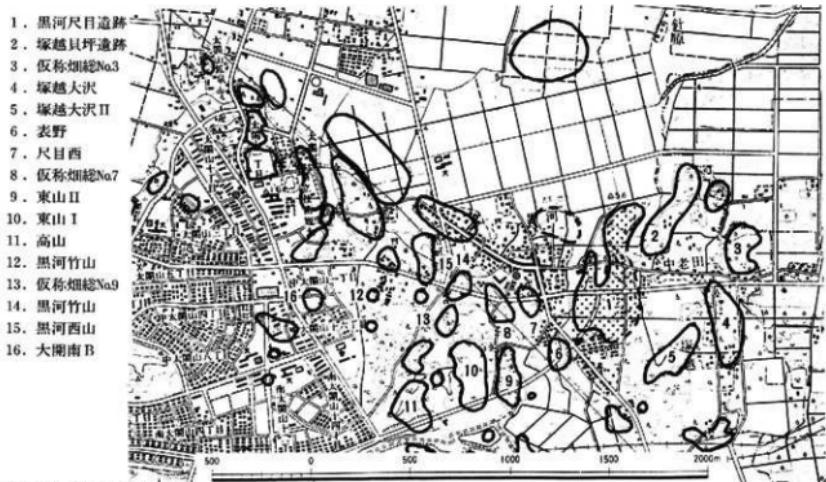
周辺における遺跡で最も多く存在するのは、富山市西部から大門町にかけての射水丘陵のほぼ全域にわたって奈良時代から平安時代にかけての須恵器窯跡や製鉄炉・製鉄用木炭を焼いた炭焼窓跡の生産遺跡である。この丘陵一帯は、丘陵性山地に樹枝状の谷が入り組み平野に近いこと、良質の粘土に恵まれていること、山林から燃料が得やすいことなど自然条件の整っていることから古代の手工業生産地として主要な役割を果たしていた地域と言われている。

この他、遺跡周辺には、旧石器・縄文時代をはじめ弥生時代後期から古墳時代初期にかけての集落や古墳の存在が多く知られている。

II. 調査に至るまで

1. 調査の経緯

富山県教育委員会では、県道七美・太閤山線の建設計画の具体化に伴い庄川以東小杉町黒河までの区間で遺跡の分布調査を昭和51年に実施し、黒河尺目遺跡を含め新たに18箇所の遺跡の所在を明らかにした。このため、県道の建設に先立ち当遺跡に係る副員約26m、総延長約220mを対象として、昭和60年11月から昭和62年7月までの間に4次にわたる発掘調査を実施している。



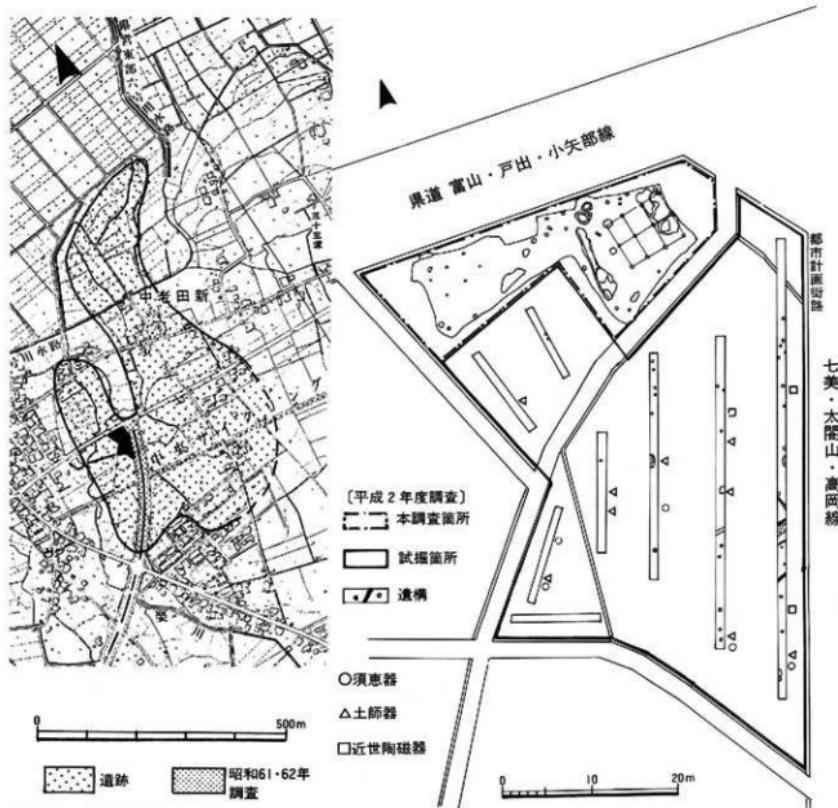
第1図 位置と周辺の遺跡

調査の結果、主に奈良時代前半の掘立柱建物3、溝、多くの穴と、中世の柵列をもった掘立柱建物1が検出されている。また、遺物では、鉄生産に関連した精練鍛冶溝・砂鉄製錬溝・炉壁などや、生漆の付着した須恵器杯身から漆紙の遺存が確認され、一般集落遺跡の出土例として注目されている〔岸本他1988・関他1988〕。

この他、昭和63年11月には、小杉町教育委員会が県道富山・戸出・小矢部線の北側で店舗兼住宅の造成に伴う発掘調査を行い、溝1条と縄文時代中期や、奈良時代の土器などが検出されている。

2、平成2年度の調査

先に発掘調査が行なわれた県道七美・太閤山線の西側はガソリンスタンド建設の予定地として計画された。平成2年6月と10月に予定地の農地転用届けが北川石油産業から小杉町に提出された。小杉町教育委員会では、遺跡の範囲に含まれたため事業者と事前協議し発掘調査を行なうことになった。北地区の試掘は約323m²を対象に9月29日に実施し、引き続き本調査を10月6日から10月23までに延べ6日間おこなった。また南地区の試掘は、約1,000m²を対象に12月22日重機を用い幅約1mの試掘溝を設け、遺跡の範囲・内容等を確認した。



第2図 遺跡と発掘区

3、平成3年度の調査

南地区における試掘の結果、奈良・平安時代と近世の遺物が対象地全体から出土した。また、東側の県道七美・太閤山線寄りに柱穴状小ピットや穴が多く存在したため事業者と協議し、平成3年に本調査を行なうことになった。

本調査は、平成3年6月12日から8月12日までに延べ41日間行なった。発掘面積は、約1,000m²である。

III. 調査の概要

1、平成2年度の調査

(1) 遺構 (第3～5図)

調査で確認した遺構は、掘立柱建物1、溝1、穴7、柱穴状ピットなどである。これまで発掘された遺構の多くが奈良時代に含まれていたが、北地区的調査では平安時代の遺構が検出された。

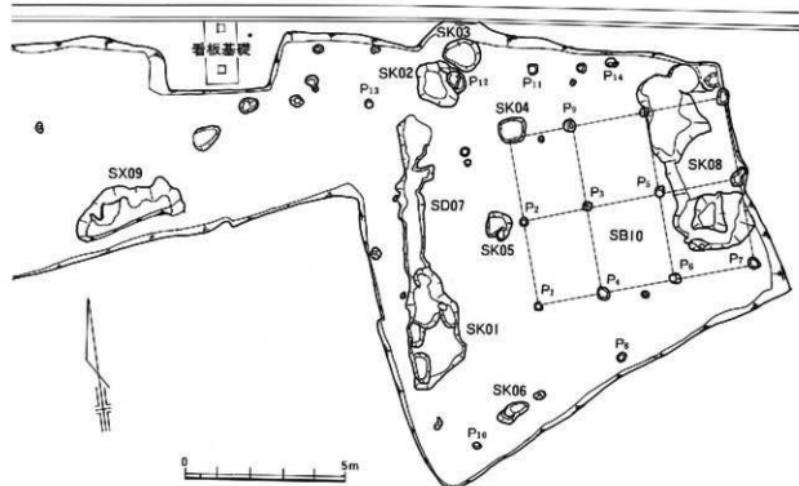
調査区の基本的層序は、I層耕作土の茶褐色土(15～25cm)、II層黒褐色土(5～35cm)、III層 暗褐色土(0～5cm)、IV層地山の淡灰黄土の順序で堆積している。遺物の包含は、I・II層にわずかに含み、遺構は、IV層まで掘り下げこの面で検出した。

① 掘立柱建物 (第3・4図)

S B10 3間(6.9m)×2間(5.4m)の縦柱の掘立柱建物。主軸方位N-87°-Eを測る。柱間寸法は南側柱列で西方より2.1m、2.3m、2.5mを測り、西側P₁～P₄柱列で北より2.7m、2.7mである。柱筋は比較的よくとおる。柱穴掘方は30～40cm前後の略円形をなし、深さは25～40cmである。P₁から須恵器片・炉壁・円窓各1点、P₂から土師器片1点が出土したが小片のため時期を特定できない。床面積は約38m²である。

② 溝 (第3・5図)

S D07 掘立柱建物の西3mに位置する。南北方向に伸びる溝で、長さ2.4m、幅0.6～1.0m、深さ5cmと浅く本来の遺構面はもっと上面にあったと思われる。黒色土の覆土から第6図7の須恵器や土師器片数点が出土している。



第3図 遺構全体図 (1/150)

③ 穴(第3~5図)

SK01 SD07の南側に接した不定形な穴である。長さ1.0m、幅0.9m、深さ15~30cmを測り底には小穴がある。覆土からは第6図1・2の糸切り痕の土師器底部3や甕片2、須恵器の甕片1、一部が黒く焼けた人頭大の円錐2点が出土し、時期は土師器から平安時代にあたる。

SK02 SK03の南側に接した不定形な穴である。長さ1.5m、幅1.35m、深さ40cmを測り、覆土からは須恵器・土器片各1点と、第6図8 フイゴ羽口、10の製鉄炉の炉壁が出土した。東側には柱穴状の掘込みがある。

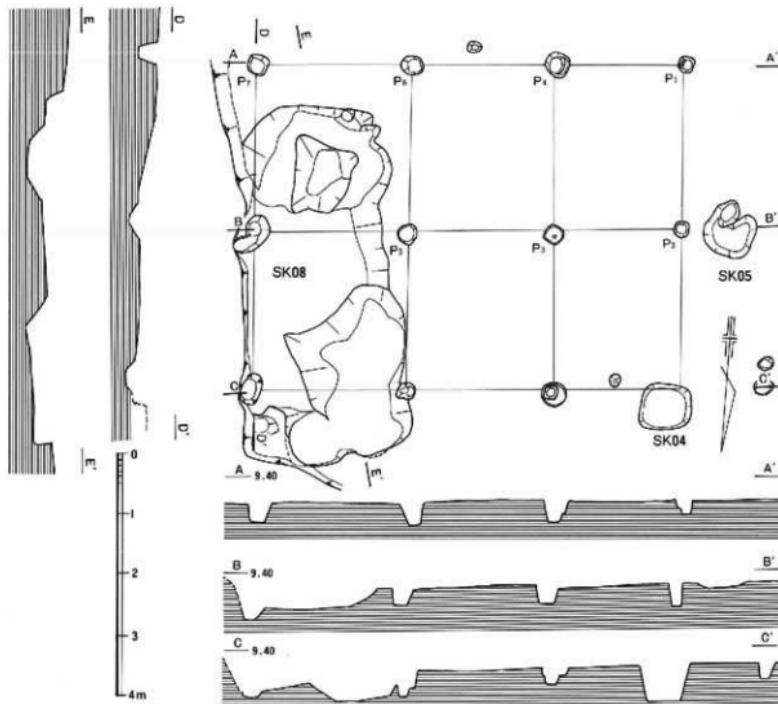
SK03 調査区の北端に位置する穴で、長さ2.7m、幅2.3m、深さ12cmを測り、出土品はない。

SK04 調査区の中央に位置する穴で、長さ8.8m、幅7.7m、深さ50cmを測る。遺物は主に覆土下層の⑤層から出土した。土器では第6図3・4の須恵器の甕・杯蓋と土師器片数点があり、他に11の鉄滓、重さ0.3~1.2kgの10個程の礫、人頭大の礫を砥石としたものがあり、中に黒く焼けた甕2点も含まれていた。これらの遺物は、出土状況から穴に廃棄されたものであろう。

SK05 長さ0.95m、幅0.8m、深さ10cmを測る不定形な穴で、出土品はない。

SK06 調査区の南端に位置する不定形な穴で、長さ0.8m、幅0.2m、深さ20cmを測る。

SK08 調査区の東端に位置し、不定形な穴で、長さ3.4m、幅1.3m、深さ30~60cm程を測る。覆土は上層より黒色土次いで黒褐色土が堆積し、底面よりは地山の淡灰黄色土と黒褐色土の混り土となっている。遺物は遺構上面から



第4図 墨立柱建物・穴造構図(%)

須恵器・土師器片数点が出土しているが、遺構内からの出土はなかった。この穴の北側は中央部より20cm程深く、南側では30cm程深く掘込まれている。穴の底面からS B10の掘立柱建物の柱穴を検出しており、遺構の切合い関係からこの穴より掘立柱建物のほうが古くなる。

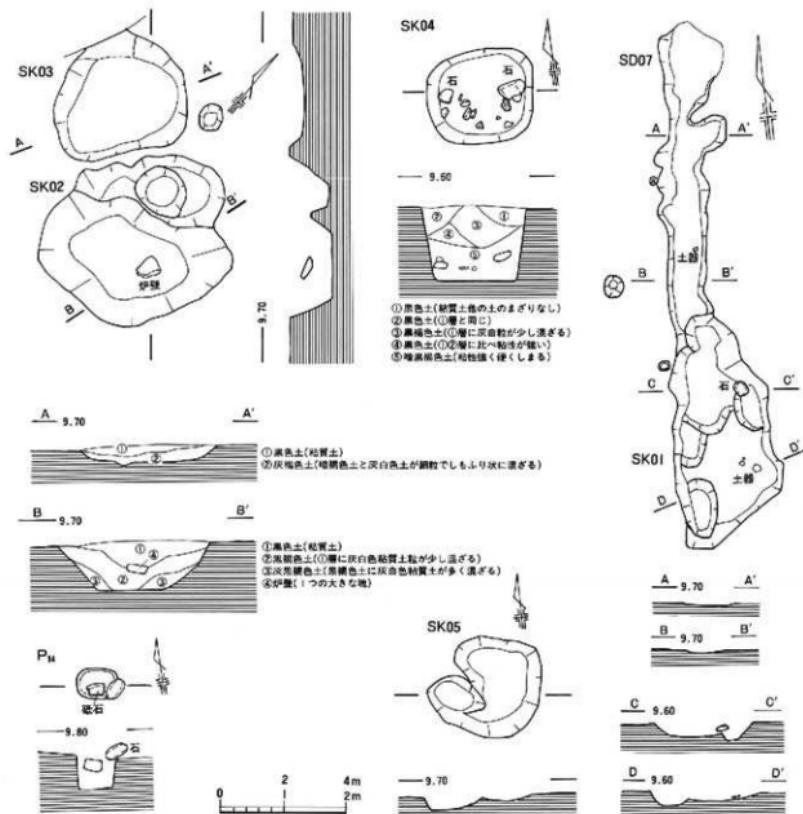
S X09 調査区の西寄りに位置する不定形な穴で、いわゆる風倒木の痕跡とされるもので、地山面で黒色土がドーナツ状にめぐる。穴は東西3.4m、南北1.3m以上の大きさで土師器2点がでた。この他、P_H上部から第6図9の砥石と、黒く焼けた円錐が出土している。

(2) 遺物 (第6図・図版2)

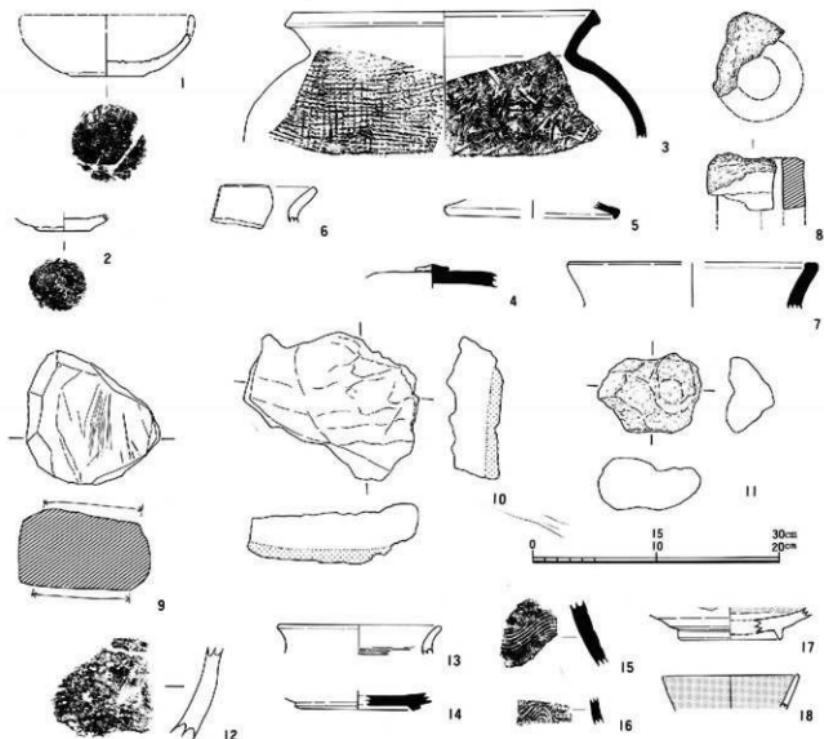
調査で出土した遺物は、縄文時代の土器、奈良・平安時代の須恵器・土師器など、中世の珠洲・近世の陶磁器である。中でも主体は奈良・平安時代の遺物であるが、出土量は多くない。

① 縄文時代の遺物 (第6図の12)

12は、調査区の西端で出土したもので、無文の土器である。以前の調査では中期の土器が出ている。



第5図 穴・溝遺構図 (SK01・SD07は%, 他は%)



第6図 出土遺物 (9~11はSK01、他はSK04、1・2はSK01、3・4・11はSK04、5はSK02、7はSK07、6・8・10はSK02、9はP14、12~18は試掘の出土品)

② 奈良・平安時代の遺物 (第6図の1~11、13~14)

土師器 (1・2・6・13) 1・2は、糸切り痕をもつ壺の底部で、1の内底面には渦巻き状の整形時の沈線がみられ、平安時代末頃であろう。6・13は壺の口縁部で、6は口径20cm程の大形のもの、13は口径14cmの小形のもので内面にハケ目調整がのこる。

須恵器 (3~5・7・14) 3は中形の壺で、外面に格子タタキを、内面に放射状のタタキを行なう。4・5は杯蓋では扁平な宝珠つまみがつき、5は口縁端部が下方にとがる。14は杯身底部である。7は直口壺の口縁部で、小破片のため口径に正確さを欠く。

斐ゴ (8) 8は斐ゴの羽口で、直径7.2cmの円筒状をした土師質の土製品である。先端部は、熱を受けガラス状に黒褐色に変化している。

炉盤 (10) 小破片を含め4点が出土している。10はこの中で最も大きな塊で、図の梨地部にスサが入る。炉内側の表面はガラス状にとけて凹凸がみられ、重さは964gである。

鉄津 (11) 1点が出土し、重さは567gである。

砥石（9） 2点が出土しており、石質は砂岩である。9は両面が使用され、磨面に線状の擦痕がついている。

③ 中近世の遺物（第6図15～16）

珠洲（15・16） 壺の体部に櫛状具を用いて波状文が施文される。

越中瀬戸焼（17・18） 数点が出土している。17は上部に銅線の軸をかけた小皿で、18は鉄軸をかけた小皿であり17～18世紀のものである。

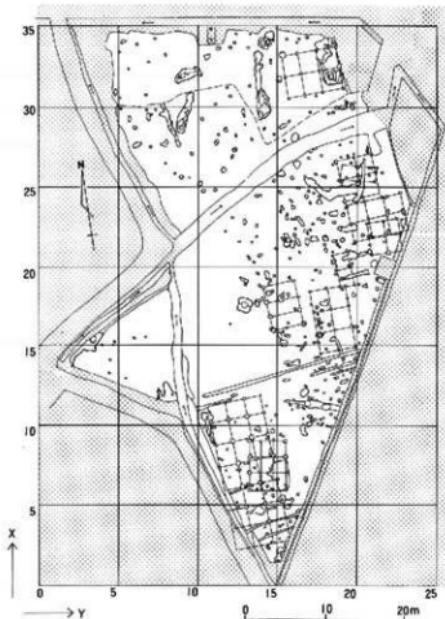
（3）小 結

平成2年に本調査を実施した北地区から検出された遺構は、掘立柱建物1、溝1、穴8などであり、小面積のわりにはまとまっていた。この内、遺構どうしの重複はSB10とSK04、SB10とSK08、SK01とSD07の合わせて3箇所であった。掘立柱建物と穴の切り合いで、掘立柱建物が古く穴が新しい。遺構からの出土遺物は少ないが、時期は大まかに8世紀後半から9世紀前半にあたる。

昭和61・62年に本調査を実施した県道敷きからは、奈良時代（8世紀第2と第3四半期）と中世の遺構が検出されている。掘立柱建物は奈良時代と中世の合わせて4棟があり、今回の掘立柱建物SB10との主軸方位を比較すると、奈良時代前半のSB24に角度が近く、同じような方位となる。

出土遺物では、鉄生産の関連を直接示す鉄滓や製鉄炉の炉壁と、間接的に関連が想定される焼けた石がSK01・02・04、P_s・P_u・P_uの10m程の範囲からみつかっている。これらの遺物は、各遺構に廃棄されたものである。

調査では円環や角環が十数点出土しており、石組み遺構の存在が推定される。製鉄関連の遺物は、以前の調査でも出土しており、遺跡全体の性格を表している。



第7図 発掘区割図

2、平成3年度の調査（南地区）

（1）調査の方法

南地区は、これまで畠地及び梨の果樹園として利用されてきた。調査に際してまず、ガソリンスタンド建設予定地の表土を重機（バッカホウ）によって除去した。ついで北側の県道沿いの溝の方向をグリットのX軸とし第7回示したような10mの方眼を調査区全体に設定した。グリットは南北にX軸、東西にY軸をとり、2mを単位とした遺物の取上げを行なった。

調査は南側から進め、20～30mを単位に遺構確認を行い、柱穴や穴などの遺構検出面の状態を記録した後、遺構を振りあげ図面を作成し、この順序をくりかえした。

（2）遺構（第8～13図）

南地区的調査で確認した遺構は、掘立柱建物9、溝1、穴7、柱穴状ビットなどであり、前年の調査で検出された遺構の種類や性格など内容が共通している。

遺構の分布状況は、東側の県道沿いに多く存在し、西側では少なかった。

また、層序は、南地区と同様であり、I 層耕作土の茶褐色土、II 層黒褐色土、III 層暗褐色土、IV 層地山の淡灰黄色土の順序で堆積している。遺構はIV層まで掘り下げこの面で検出した。

① 挖立柱建物（第8～11図・第3～4）

S B11（第9図） 調査区の南端に位置する。桁行8間（60.6尺）、梁行3間（23尺）の純柱建物をした南北棟である。桁行はCセクションの南端に柱穴が存在することから更に南側に伸びる可能性がある。Pには四角に面取りされた太さ20cm程度の柱根部が残存する。柱穴の掘り方は（第9図右下）柱根部より10cm程大きく掘られている。他の柱穴も遺構確認面での状態は、柱痕を示す黒色土の直径が20cmあまりの大きさであった。また、北側の柱穴は、全体に直径が小さく浅く掘り込まれている。柱穴からの出土遺物は奈良時代の須恵器杯や、平安時代から鎌倉時代にかけての土師質土器・青磁がみられる。

S B12（第9図） 調査区の南端に位置し、S B11と重複する。桁行3間（20.6尺）、梁行2間（15尺）の南北棟に建てられた純柱建物である。S B11とは方位約12°の違いがあり、柱穴の直径は小さく浅い。柱間は、約7尺と5尺とほぼ等間隔に配される。柱穴からの出土遺物はP、P_aから土師器壺片と土師質土器細片合わせて3点と少なく、S B11との新旧関係は明らかでない。

S B28（第10図） 調査区の中程に位置する。桁行3間（26.7尺）、梁行2間（15尺）の南北棟である。柱穴は直徑20～30cmと小さく深さも40～50cmとほぼ均一に掘り込まれる。柱穴からの出土遺物はない。

S B29（第10図） 調査区の中程に位置する。桁行3間（21.7尺）、梁行1間（10尺）の南北棟に建てられた建物である。柱間は、不均等に掘られており、柱穴からの出土遺物はない。

S B30（第10図） 調査区の中程S B28の北側に位置する。桁行2間（14.3尺）、梁行1間（6.3尺）の南北棟に建てられた建物である。柱穴は直徑20cm弱と小さく柱穴からの出土遺物もない。

S B31（第11図） 調査区の中程に位置し、S B32と北側で重複する。桁行・梁行各2間（13.3尺）の建物である。

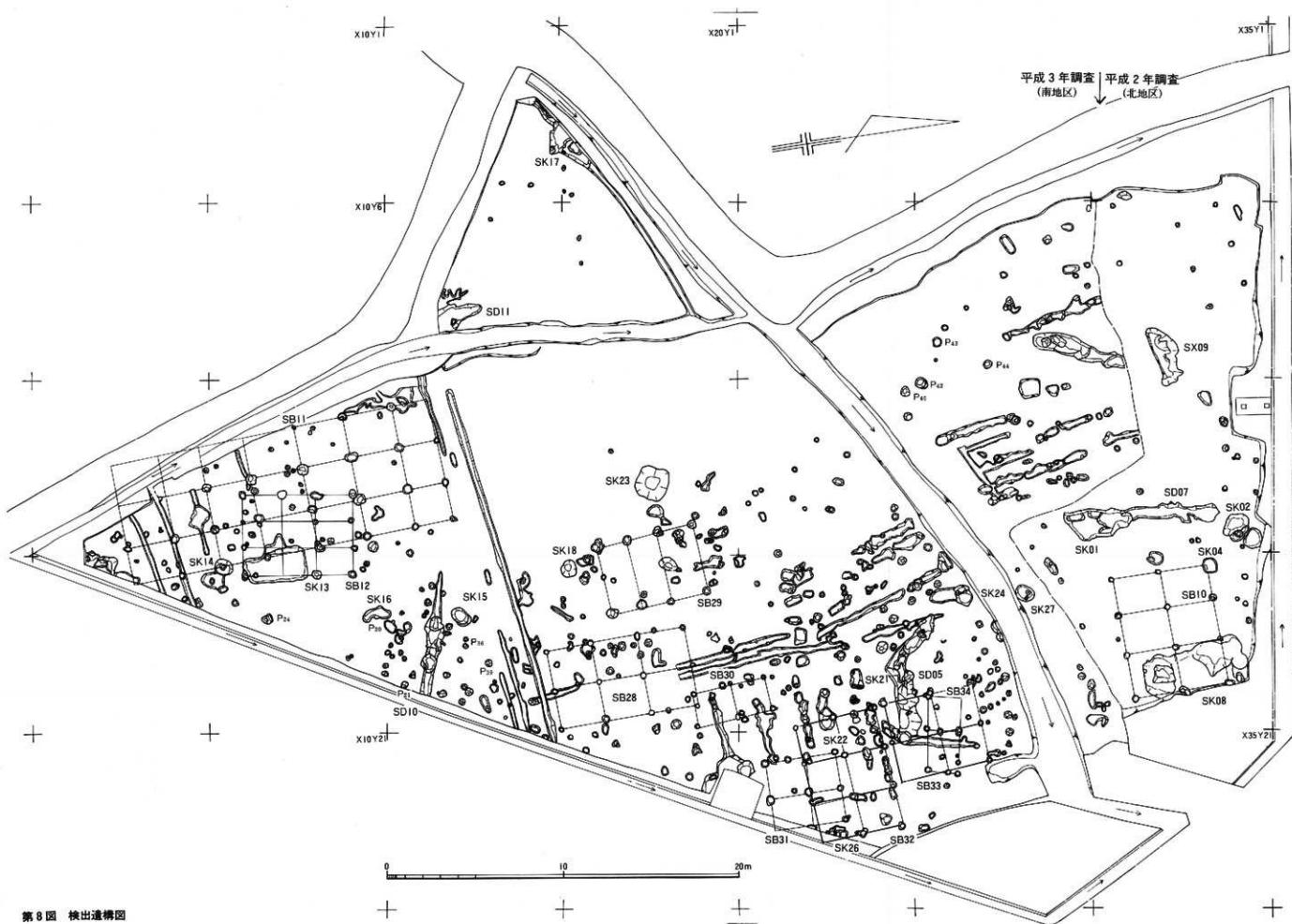
S B32（第11図） S B31と南側で重複する。桁行3間（22.7尺）、梁行2間（15.7尺）の東西棟に建てられた建物である。S B31との方位は約5°の違いがある。Pには、柱根部が残存していた。柱は、一辺10cm程の方形に加工されており、直徑約20cmといずれも小さな柱穴が掘られていて、大きな柱は利用されていない。

S B33（第11図） S B34と重複する。桁行2間（26.7尺）、梁行2間（14.7尺）の南北棟に建てられた建物である。南東隅の柱跡は残存していなかった。柱穴からの出土遺物はP、P_aから土師器片が若干出ている。

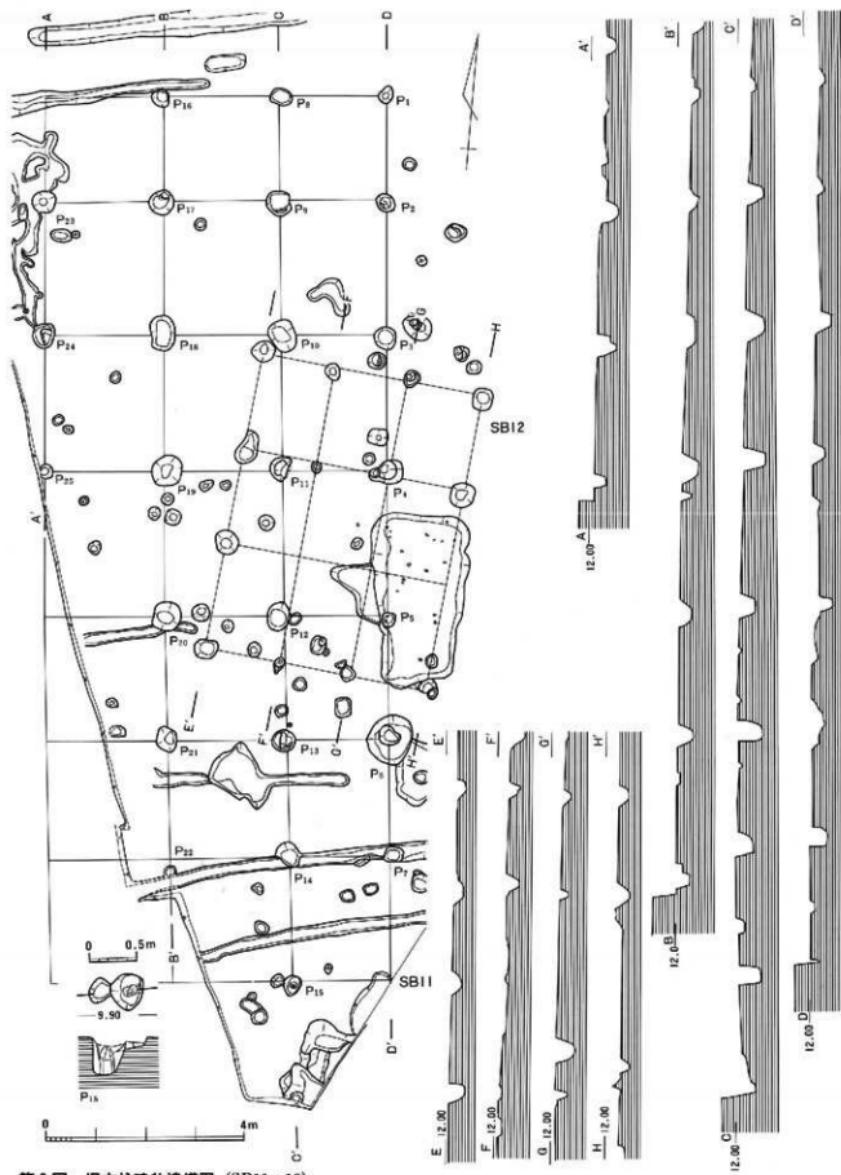
S B34（第11図） S B33と重複する。桁行2間（14.0尺）、梁行1間（9.0尺）の東西棟に建てられた建物である。北東隅の柱穴は残存していなかった。柱穴からの出土遺物はないが柱穴の大きさ・深さはS B33と大差がみられない。

遺構	規模	柱間 (北→南) × (東→西)	平面積	方位	山上遺物
S B10	5.3×6.9	2×3 (2.6+2.7) × (2.5+2.3+2.1)	36.6	N-約75°-E	土師器
S B11	18.2×6.9	8×3 (2.1+2.8+2.8+3.0+2.4+2.6+2.6) × (2.75+2.85+3.0)	125.6	N-約16°-W	須恵器・土師質土器
S B12	6.2×4.5	3×3 (2.0+2.0+2.2) × (1.5+1.5+1.5)	27.9	N-約4°-W	土師器・土師質土器
S B28	8.0×4.5	3×2 (2.7+2.6+2.7) × (2.25-2.25)	36.0	N-約14°-W	
S B29	6.5×3.0	3×1 (2.5+1.9+2.1) × (3.0)	19.5	N-約17°-W	
S B30	4.3×1.9	2×1 (2.0+2.3) × (1.9)	8.2	N-約17°-W	
S B31	4.0×4.0	2×2 (1.8+2.2) × (1.9×2.1)	16.0	N-約12°-W	
S B32	4.7×6.8	3×2 (2.3+2.3) × (2.3+2.3+2.2)	32.0	N-約71°-E	
S B33	5.0×4.4	2×2 (2.2+2.8) × (2.2+2.2)	31.7	N-約16°-W	土師器
S B34	1.8×4.2	1×2 (1.8) × (2.2+1.9)	7.6	N-約74°-E	

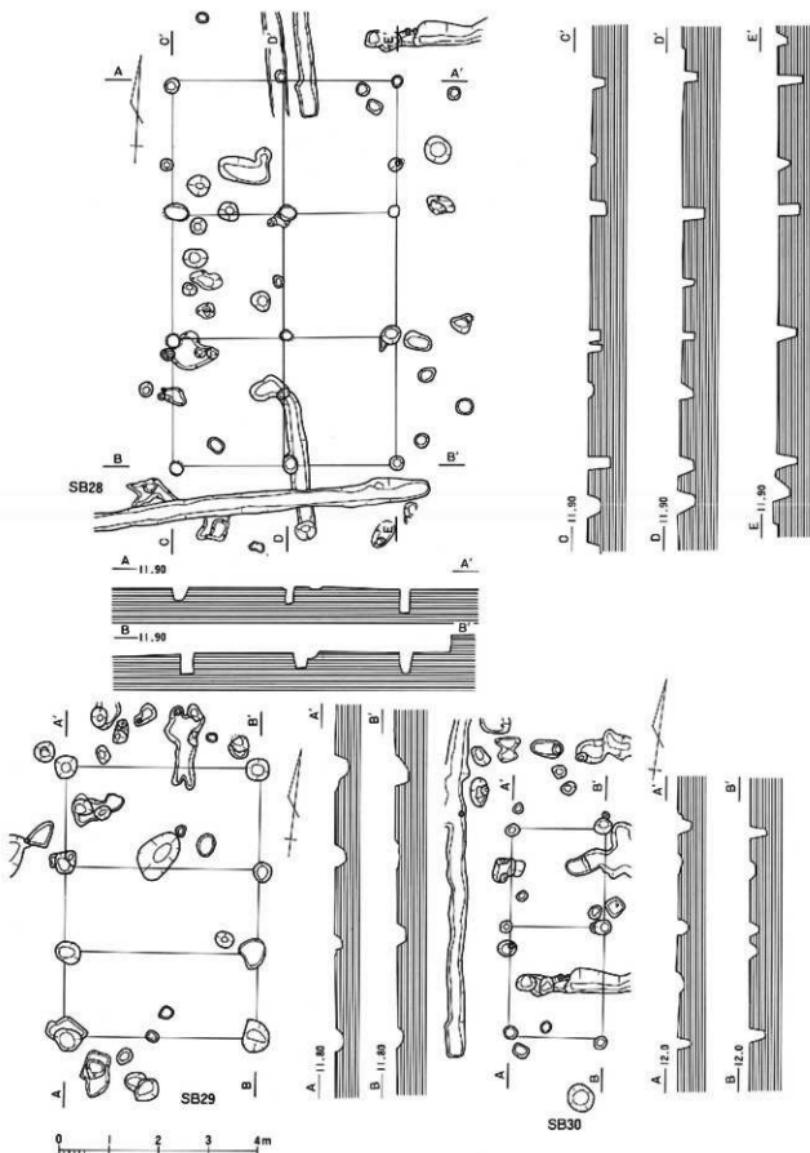
表1. 挖立柱建物一覧



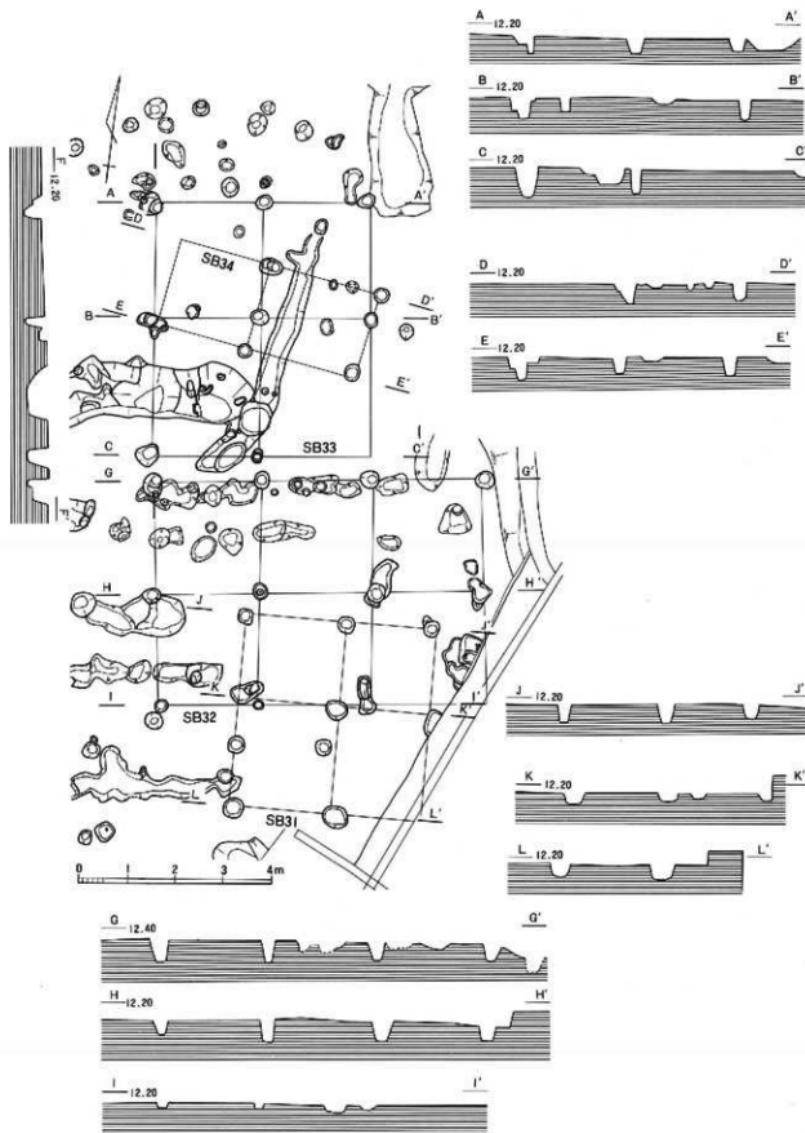
第8図 掘出遺物図



第9図 据立柱建物造構図 (SB11・12)



第10図 捩立柱建物造構図 (SB28~30)



第11図 振立柱建物造構図 (SB31~34)

② 溝（第12図）

S D10 S B28の南側に位置した溝で、幅0.3~1.0m、深さ5~25cmの規模をもつ。溝は東側の調査区外から伸びてきており、調査区内では、東西方向に長さ7mまで伸び、西端に行くに従い幅が狭くなり深さも浅くなる。溝の中程には直径数十cmあまりの大きさで深く掘られ、覆土中から奈良時代の須恵器の杯（第14図）が出土している。

③ 穴（第12・13）

S K13（第12図） S B11の西側に重複している。平面形は方形をなし、穴の規模は長さが3.4m、幅が1.4~1.9mあり、深さは10~15cmと浅い。覆土の黒褐色土中からは須恵器3点と共に土師質土器の細片30点余りが出土している。遺構上面の状態では、S B11、S B12の柱穴の切合い関係はみられず、柱穴よりS K13が新しく掘り込まれる。

S K14（第12図） 調査区の南端に位置しS K13の南側にある。平面形は1.6×2.1mの大きさの不整円形をなし、深さ20~30cmの穴の中央には、柱穴が後から重複して掘り込まれている。覆土の黒褐色土中からは土師質土器が数点出土している。

S K15（第12図） 調査区の南側に位置しS D10の北側にある。平面形が楕円形をした穴で、地山面からの掘り込み深さは75cmあり、穴の上半に数cmから20cmほどの大きさの円礫や角礫が入っており、石と共に上師質土器の細片10点が出土した。穴の掘り込みは、地山の灰白色粘質土までの深さで、下層の砂質土に達していない。

S K16（第12図） 調査区の南側に位置しS D10の南側にある。遺構の掘り込み面は地山面より約20cm上方の黒褐色土中にあり、穴の下半の覆土には土器は含まれず、上半の黒褐色土に黄灰色土が混ざる上層から奈良時代の須恵器や土師器が出土した。穴の平面形は不整形な長方形をなし、長さ3.3m、幅0.9~1.3mの大きさをもち、地山面からの掘り込みの深さは約20cmである。

S K17（第8図） 調査区の西端に位置する。穴は調査外に広がっているため、全体の形や規模が明らかでない。覆土は黒色十が入り、出土遺物はない。現状での長さは5.1m、最大幅1.4mの大きさをもち、深さは一様ではなく不規則となっており、地山面からの掘り込み深さは、最大45cmである。

S E18（第12図） 調査区の中程に位置し、S B29の南側にある。平面形はほぼ円形をなし、断面は円筒形となる。大きさは直径約0.9m、深さ1.25mを計る。穴の掘り込みは底面は地山の青灰砂質土に達している、調査時には、わずかづつ水が浸透してきたことから素掘りの井戸として用いられたと思われる。覆土からは、鎌倉時代に属する円礫に混じり土師質土器・珠洲・青磁や箸状木製品・板材などの多くの遺物が出土した。遺物は上半から主に土器があり、下層から主に木製品が出土した。この他に底からクルミやもの種子に似たものもあった。

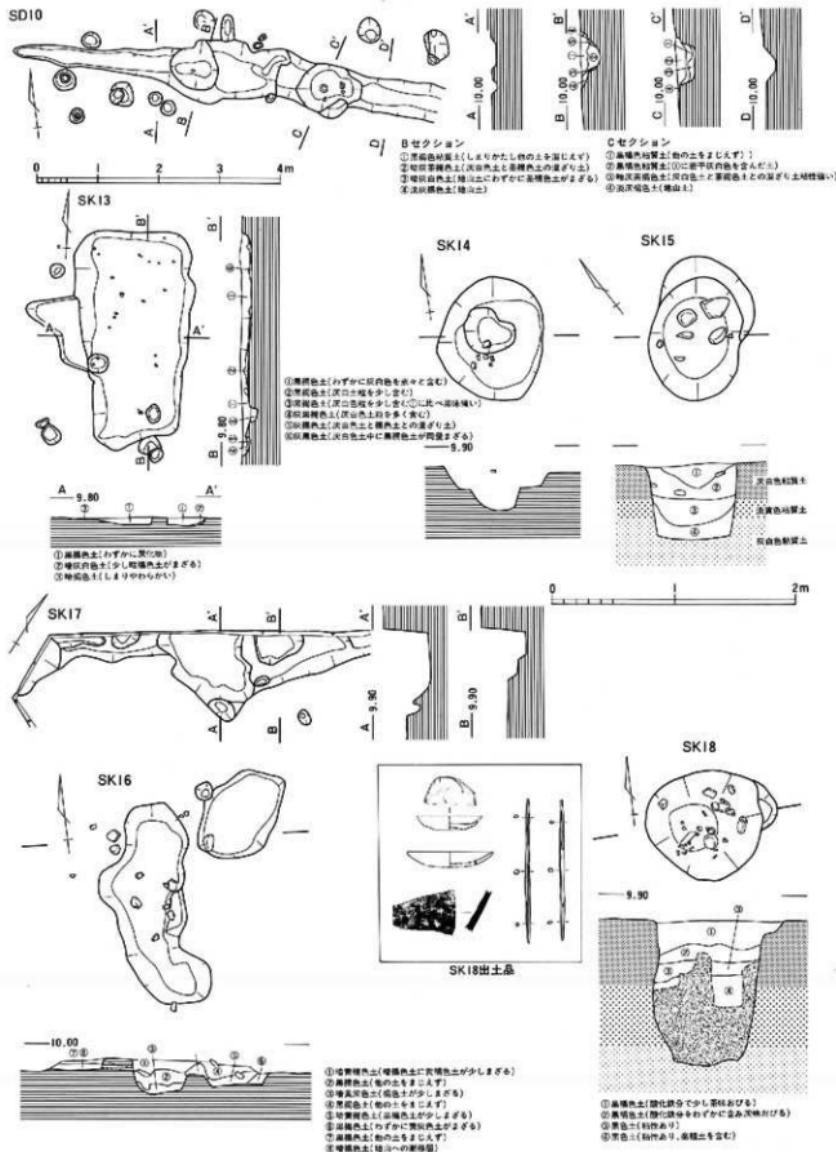
S D19（第8図） 調査区の西側に位置し、用水路のそばにある。時期は近代に属し、不規則に掘られた溝である。覆土や溝の底からは須恵器・珠洲・近世の陶磁器が出土した。

S K20（第8図） 調査区の中程（X21Y22区）に位置する。穴の東側は掘削を受けて全形が不明であるが、直径0.9mの円形をしていたと思われ、深さ35cmに掘られている。覆土の黒褐色土から須恵器片1点が出土している。

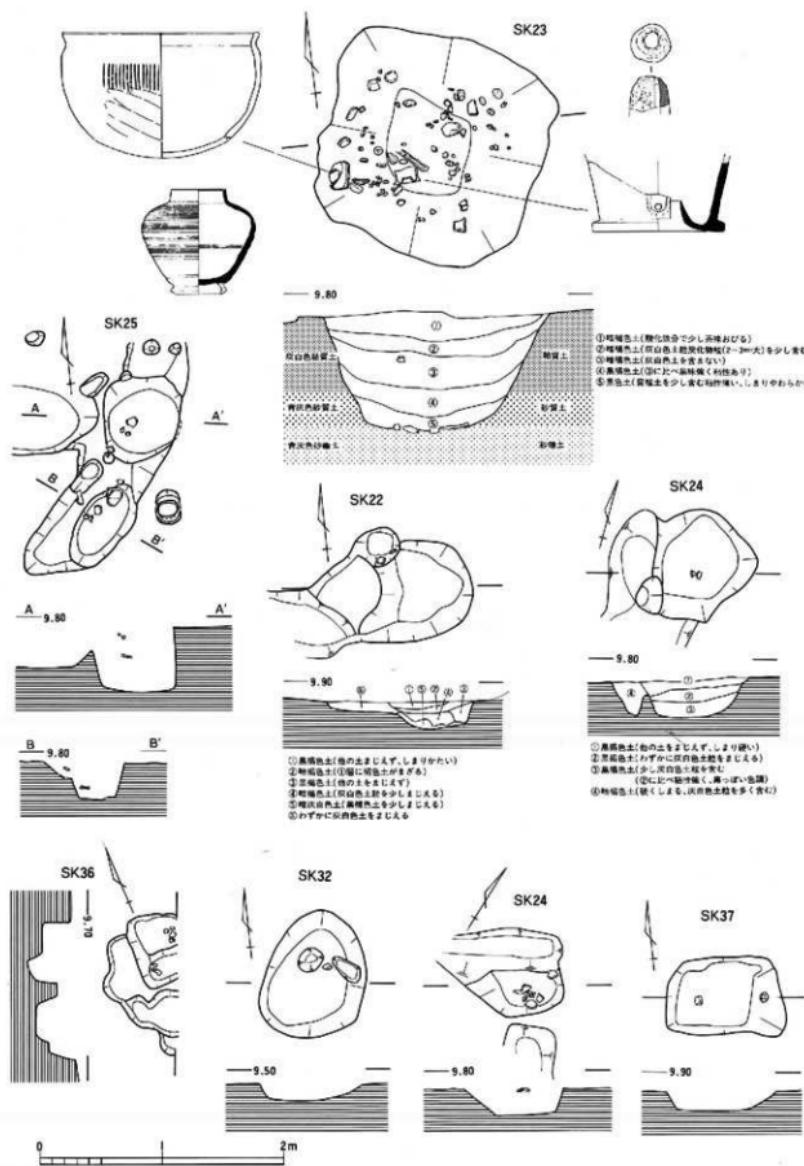
S K21（第8図） 調査区の北側（X24Y19区）に位置する。大きさは長さが1.1m、幅が0.6mあって、地山面からの掘り込み深さは15cm程であり、出土遺物は覆土からの上師器1点である。

S K22（第13図） 調査区の北側（X23Y20区）に位置する。大きさは長さが2.7m、幅が1.7mあって、西側は擾乱をうけている。穴の東側は西側より20cm程深くなっている、覆土からの出土遺物は土師器2点である。

S K23（第13図） 調査区の中程（X18Y13区付近）に位置する。平面形は隅丸方形をなし、断面は台形となる。規模は一辺の長さが3.7m、地山面からの深さが約2.0mの大きさがあり、底面は青灰色砂層の下に堆積する青灰色礫層まで達している。穴の上面肩部からは第17図109の鍋が検出され、覆土の全般からも奈良時代の遺物が多く出土した。遺物には須恵器の杯蓋・杯身・短頸壺・瓶、土師器の鍋・甕、フイゴの羽口・鉄滓・製鐵炉の炉壁など数十点に



第12図 溝・穴道構図 (SD10~18)



第13図 穴道構図 (SK22-27・35)

及ぶ。出土した須恵器や土師器では少し接合するものもあり、土層がレンズ状に堆積することからも、穴の廃絶後に入った遺物である。

S K24 (第13図) 調査区の北側 (X27Y17区) に位置する。穴の西側が擾乱を受けているが、平面形は直径約1.8m程の大きさをもっと推定される。地山面からの掘り込み深さは60cmであり、上面から土師器の甕が出ている。

S K25 (第13図) 調査区の北側 (X25Y17~20区付近) に位置する。地山面の状況では、黒褐色土の覆土をもつ溝と思われたが、調査の結果風倒木の痕のような土層であった。X25Y21区には直径0.7m、地山面からの掘り込みが50cm程の円筒状の穴があり、黒褐色土の覆土から土師器の甕部が出土し、南側に隣接した穴からも同一個体の土師器が検出された。

S K26 (第13図) 調査区の北側 (X23Y23区) に位置する。穴の東側は調査区外のため、穴の大きさは不明である。底面の状態から柱穴の重複した可能性があり、穴の上面から奈良時代の土師器と須恵器が出土した。

S K27 (第13図) 調査区の北側 (X28Y27区) に位置する。平面形が楕円形をした短軸1.6m、長軸2.1m、地山面からの掘り込みが15cm程の大きさの皿状をした穴である。底面から須恵器が1点出土した。

S K35 (第13図) 調査区の北側 (X22Y18区) に位置する。平面形が長方形をした長さ2.0m、幅1.3mの大きさをもち、地山面からの掘り込み深さは、25cm程である。黒褐色土の覆土から円錐1点が出土している。

柱穴状ピット (第8図) 掘り方を含めたピットの直徑は20cm~30cm程の人大きさが多く存在した。主な分布状態は建物の確認された部分と大別的に一致している。それ以外ではS D10の周辺に柱穴状ピットが集中している。

(3) 遺物 (第14~18図・図版5~8)

南地Xの調査で出土した遺物には、縄文時代の土器、奈良・平安時代の須恵器・土師器など、中世の珠洲、上師質土器・青磁・木製品、近世の陶磁器などがある。中でも土体をなすのは穴から出土した奈良時代と平安時代末から鎌倉時代にかけての遺物であるが出土量は多くない。

S B11 (第14図19~20)

20・21は奈良時代の須恵器の杯であり、19は糸切り痕をもつ土師質土器。22・23はヨコナデ調整をした土師質土器である。24は青磁の皿内面に飾描文をつけたもので、平安時代末から鎌倉時代にある。

柱穴状ピット P_a~P_b (第14図25~32)

26は須恵器の生焼け状態となった鉢であり、27・29・31は須恵器の杯蓋である。29は天井部外面にヘラケズリをする。28は高台つきの杯で、30は土師器の盤U縁部である。32は表面に擦痕のある砥石でよく使用されている。

S D10 (第14図33~37)

33は天井部外面に二条の縦割をもつ蓋。34~36は須恵器の杯身であり、37は生焼け状態の須恵器の鉢であろうか。

S K13 (第14図38~46)

38・39は須恵器の杯身であり、40は内面に同心円のタタキ目をもつ甕の破片である。41~46は土師質土器の皿で、43・46には底部に糸切り痕がのこる。41は口縁部をヨコナデ調整している。

S K14 (第14図47)

47は底部外面に糸切り痕ののこる上師質土器である。

S K15 (第14図48)

48はU縁部を面とりした土師質土器であり、成形や調整方法は23と同様である。

S K16 (第14図49~51)

49・50は土師器の小形の甕で、50の内面はハケ日調整されている。51は須恵器の杯身である。

S D 19 (第14図52~54)

52・53は江戸時代の碗で、52には高台を無釉とし内外面に鉄釉をかける。53には黄褐色の釉がかかる。54は須恵器壺片で、他に近世陶磁器が多くみられる。

S K 24 (第14図55)

55はロクロ成形をした土師器の壺であり、体部をカキ目調整し、下半部にヘラケズリを施す。

S K 26 (第14図56)

56は須恵器の杯身底部であり、外方に強く立ち上がる。

S K 18 (第15・16図57~59、図版第6~8)

57~59は珠洲であり、57は壺の体部上半に横状具による波状文を付けている。58は壺片で、59は片口鉢の内面に波状のおろし目がのこる。60は青磁の皿で、口径10cm程の大きさをもち、内面に模様を施している。

61~63は口径8・12・14cmの3種の大きさをもつ土師質土器であり、64・65はその底部である。

71~95は木製品である。66~69・71は細長い板であり、66~69は四角に加工されている。また、70は枝の一端に斜めの切断面があり、72には両端に加工痕がのこる。68・72は先端が黒く焼け焦げている。

73・74は同じ長さにそろえ、隅をおとした折敷状の板であるが目釘のあとは見られない。板の一面には、直線的に刃物跡が付き俎として使用されたと思われる。78~95は長さ19.6~23.8cmの箸状木製品であり、両端は細く削っている。破損品を含め約30点が出土している。76・77は加工痕をもつ板材である。

S K 23 (第16・17図96~112、図版第5~6)

96は須恵器杯蓋、97~100は杯身で、100は使用により器面が平滑に摩耗している。102は須恵器壺片であり、103は直口壺の口縁部破片である。107は熱により先端がガラス状にとけたフイゴである。109は須恵器の壺であるが、通常の形態と異なり、内部に直径8cm、外底面からの高さ5cmの内傾した先細りの円筒部が立ち上がる。壺下端のつばの上に内面に通する直径1.0cmの円孔を斜め上方に穿っている。この外面には、小さな開孔部がついていたと思われるが剥がれ落ちその形状は明らかでない。内面の円筒部と壺の肩部との間の器面には、淡茶褐色に変色しており内面の円筒部の高さまでは液体が貯まり、器面が変色したと思えるがどのような用途かは不明である。

109は須恵器の生焼け状態に近い淡黄灰色の色調をした剝であり、外面の上半に平行タタキを行い、下半から底部にかけてヘラケズリ調整をしている。110~112は土師器の壺で口縁部端部を少し面取りしている。体部はカキ目調整し、外面に黒く煤状炭化物が付着している。

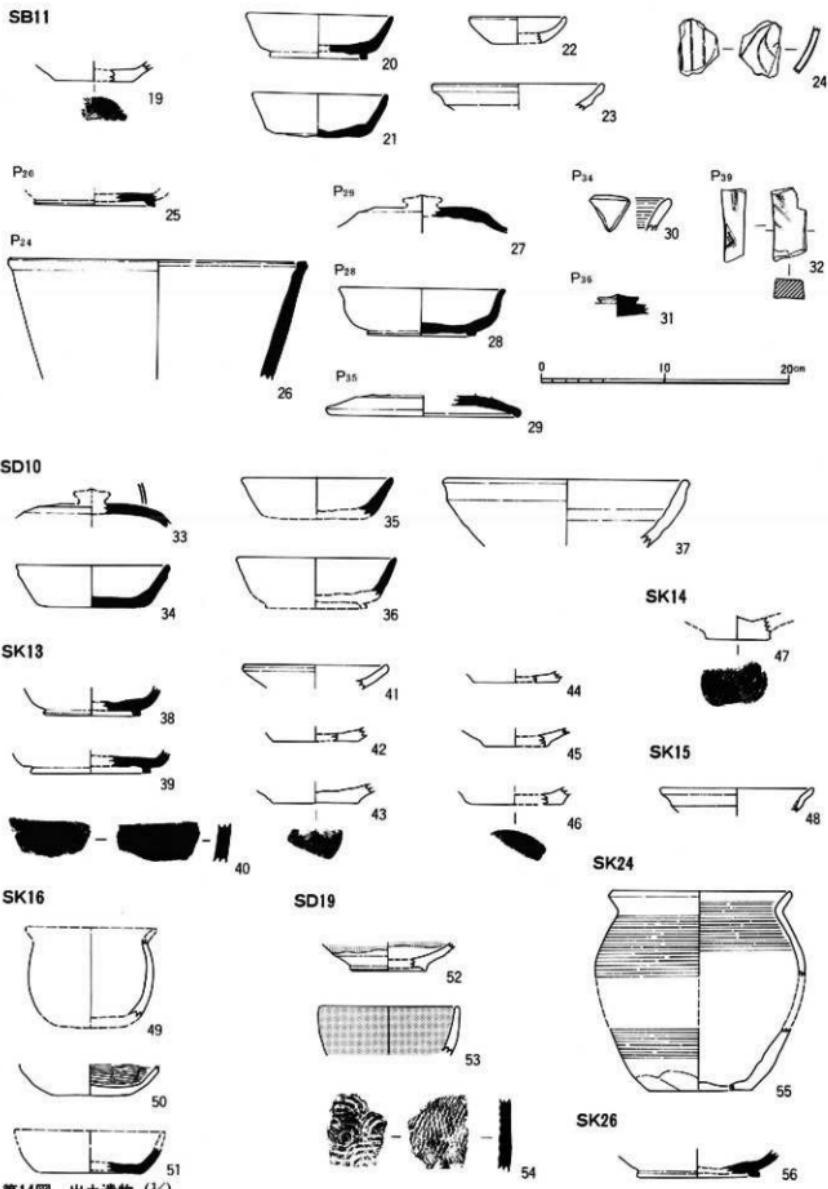
104~106は木の加工品である。104は枝の一端を両側から斜めに削り、106は中空の枝の一端を細かく削っている。105は薄い板である。

調査区内用水路出土 (第17図113~124)

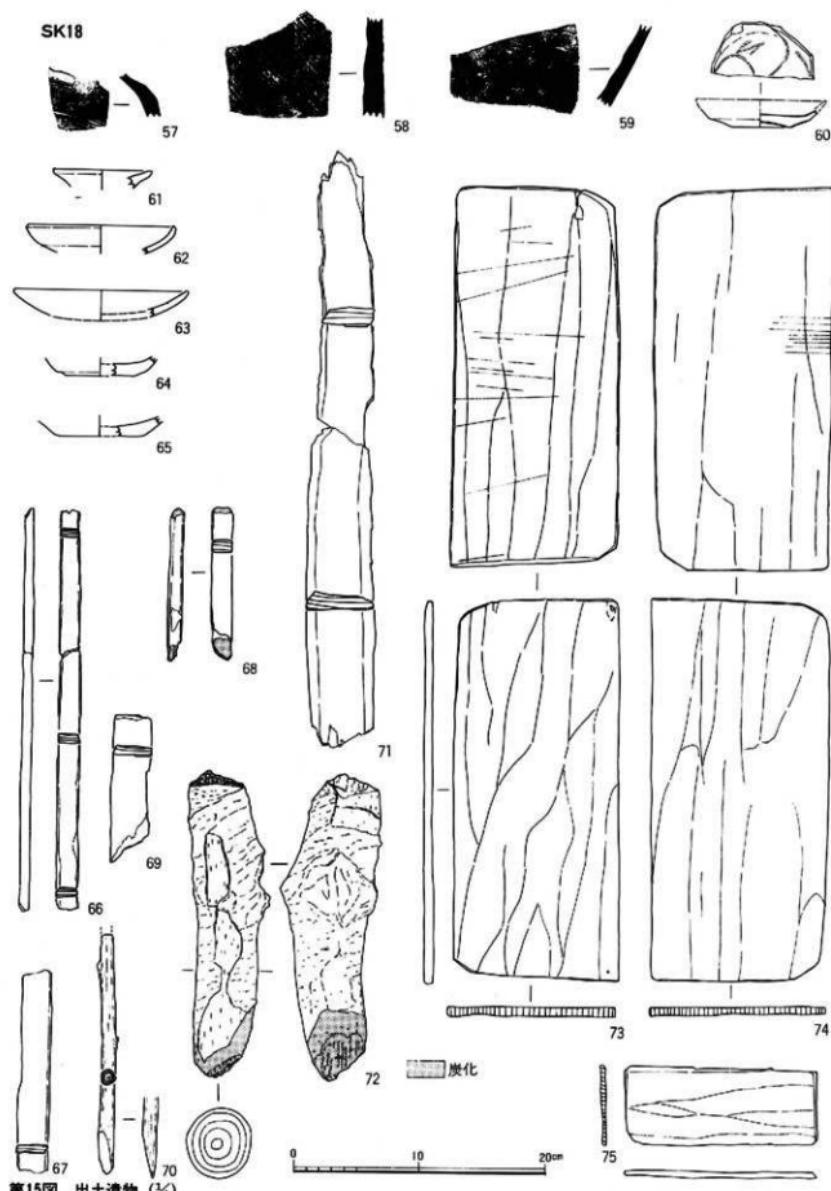
用水路の底から出土したもので、いずれも細片化した上器である。113は須恵器杯蓋、114・115は土師質土器であり115は糸切り痕がみられる。117・122は珠洲壺片で、117は珠洲Ⅲ期の口縁部に形状が似る。116~124は近世の陶磁器である。120・121は高台を無釉とする。123・124は伊万里系磁器の染付皿と碗であり、123の見込には五弁花のコニャク判をおし蛇の目釉ハギがあり18世紀に属し、124は19世紀である。

調査区内出土 (第17・18図125~162)

調査区内からは縄文時代の遺物として、縄文を地文とした土器3点と125の短圓形をした打製石斧の先端部がある。126~141は、余良時代の須恵器であり、遺物の中では量的に最も多い。126~128は杯蓋で、128は天井部外表面をヘラケズリをしたもので8世紀前半にあたる。130・131は無高台の杯、129・132・134は同じような角度で立上がりの高台つきの杯身である。135は蓋の口縁部にあたり、136は小形の壺の体部で、137は短口壺の口縁部である。

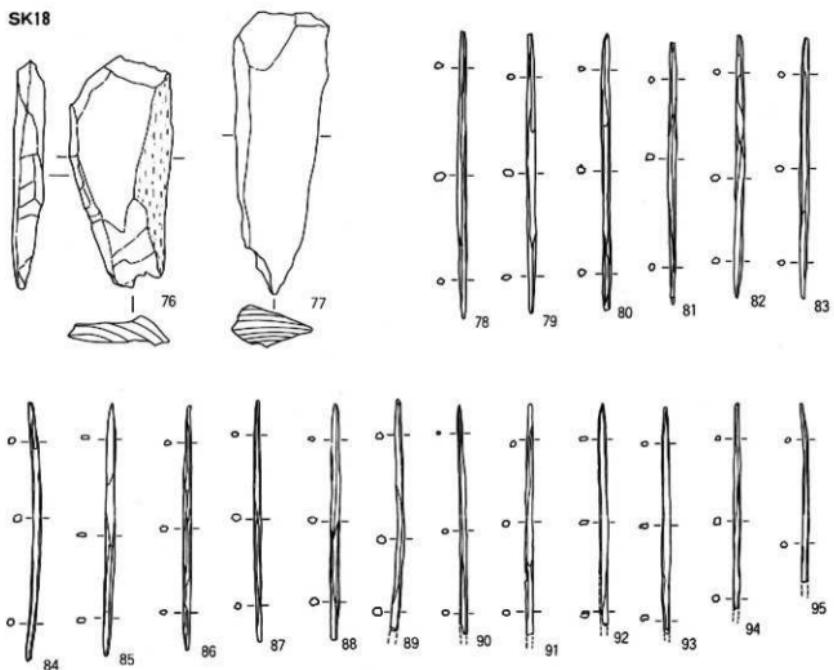


第14図 出土遺物 (A)

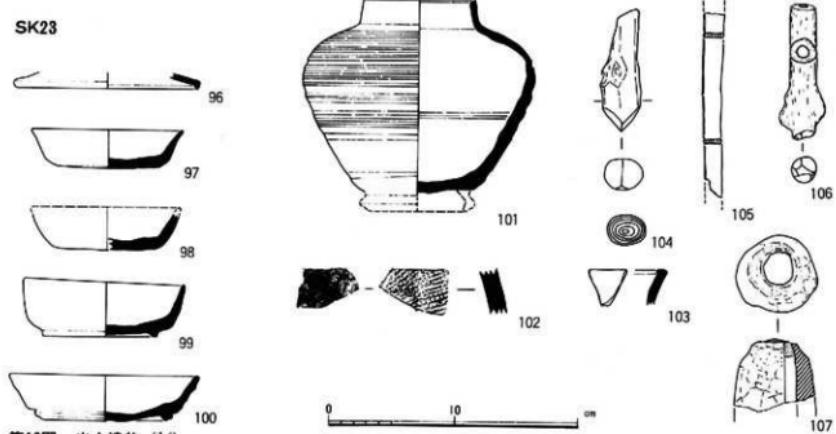


第15図 出土遺物 (34)

SK18

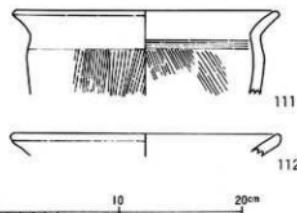
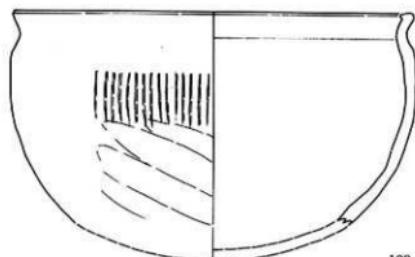
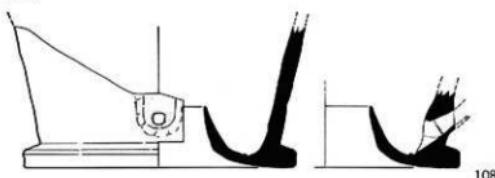


SK23



第16図 出土遺物 (3/4)

SK23



0 10 20cm

調査区内用水路出土



113



114



115



117



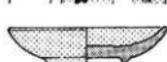
120



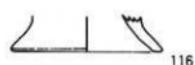
122



121



123



116



119

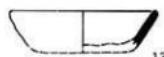


124

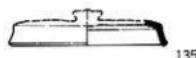
調査区出土



125



130



135



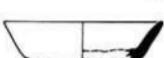
126



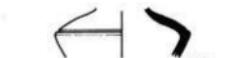
131



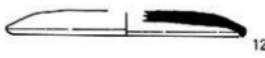
127



132



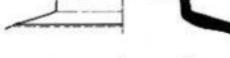
136



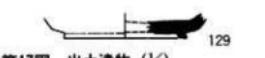
128



133



137



129



134



138

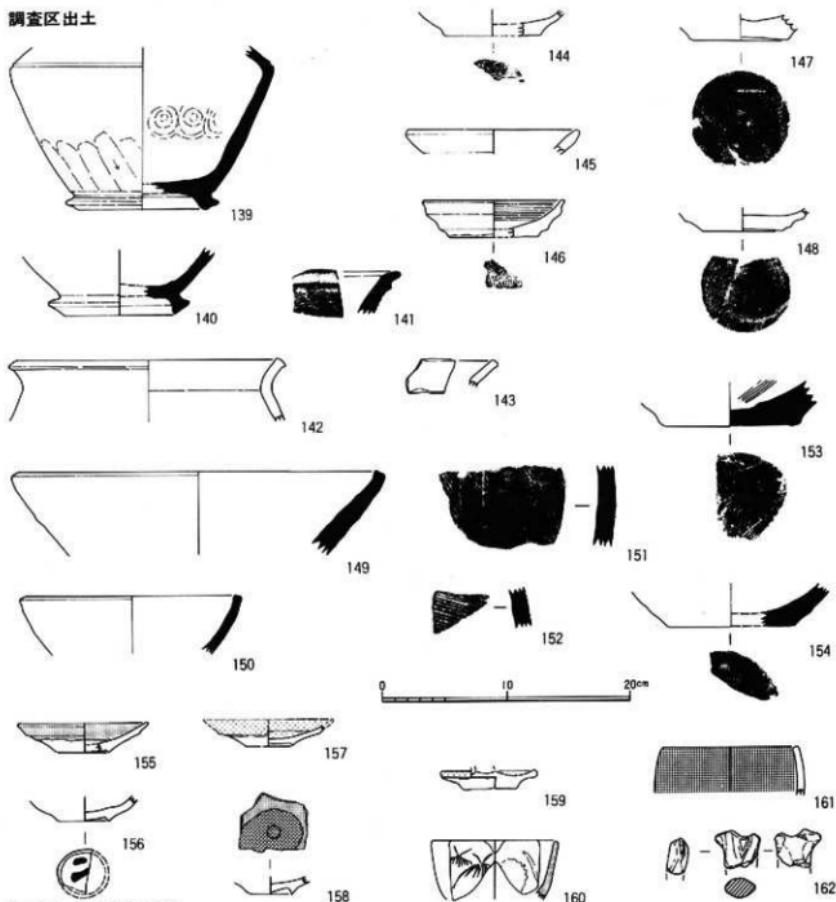
第17図 出土遺物 (3/4)

139・140は長頸壺の体部と思われ、内面には同心円のタタキ當て具痕が残り、外面下半をヘラケズリをしている。141は波文状をつけた壺の口縁部。142・143はヨコナデ調整を内外面にした奈良時代の土師器の壺である。

144～148は糸切りをしたロクロ土師器の皿であり、口径は145の14cmと146の12cmの2種が存在する。146の口縁部の内外面にヨコナデ調整を行なう。その所属時期は珠洲I期（12世紀後半）頃にあたる。149～154は珠洲の壺といわゆる摺鉢で149と150の内面は、おろし目がなく無地となっており珠洲I期に伴うものであろう。153・154は静止糸切りの片口鉢の底部である。

155～161は近世の陶磁器である。155～158は越中瀬戸の小皿で、156の外底面には「二」の字が墨書きされており、158の見込には墨状のものが黒くついている。159は糸切り底の灯明具の台部である。160は伊万里系磁器の染付碗、161は黒釉の碗であり、162は羽織を着た土人形である。これらの時期は、近世に含まれる。

調査区出土



第18図 出土遺物 (34)

IV. まとめ

今回の調査は、遺跡中央部にある約1,200m²を対象としたものであったが、対象地からは、主に奈良時代と鎌倉時代を中心とし、他に若干近世にあたる遺構・遺物が検出された。対象地の東側に接する県道敷きは、昭和61・62年に富山県教育委員会によって発掘調査が実施されており、奈良時代や中世の遺構・遺物の発見が報告されている。遺跡の所属時期や性格などは、大きく変わることはなく似かよっている。

1、遺物について

(1) 奈良時代

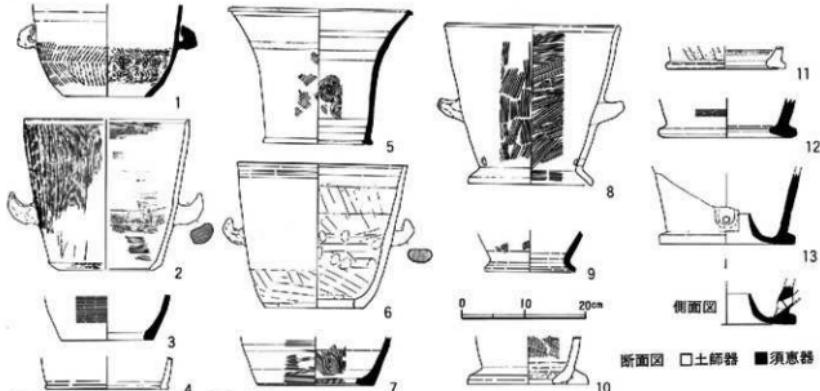
遺物がまとまって出土したのは、SK23からである。杯蓋の口縁端部が下方に折れる形態であり、また杯身100の丸みをもち外傾する口縁部、101の短頸壺の角があたった口縁端部、109の鍋の口縁端部をつまみあげ少し引き出す手法が須恵器にみられる。周辺の遺跡に對比するとこの特長は、8世紀第2四半期頃の小杉流通業務団地内No16遺跡1・2号窯、8世紀第3四半期頃の富山市古沢1号窯〔宇野他1989〕の須恵器窯跡出土品に似た形態のものがあり、8世紀中頃の時期のものと考えられる。

SK23から特異な形をした108の須恵器が出土している。管見では、同形態をした土器の類例がみあたらない。土器の底部を大きくあけたものには、甕と組合せ用いる蒸し器としての瓶があり、土器の焼成方法には上師器・須恵器の両方が存在していて、体部に把手を対して付けるものが一般的である。

これまで瓶または、底部を大きく抜いた奈良・平安時代の土器の種類には、第19図に示すものがある。この底部側端部の形態には(第19図)、A～D類の4種があり、A類は端部が体部と同じような厚さにするもの。B類は端部が内側におれ少し肥厚するもので、5は両端にひろがる。C類は端部が「く」の字状に折曲したもので、8の下方に

No	遺跡名	所在	時期	端部形態	文 獻 他	No	遺跡名	所 在	時 期	端部形態	文 獻 他
1	圓衛第1号窯	石川県 鶴来市	9C	A類	古岡1966	7	若狭ヤキノ窯跡	石川県 高松町	8C後半 ～9C	B類	西野他1985
2	寺家遺跡	石川県 羽咋市	8C	A類	小畠他1988	8	小杉流通業務団地内 第1号窯	富山市 大手町	8C	C類	宮田他1982
3	若狭ヤキノ窯跡	石川県 若狭町	8C後半 ～9C	A類	西野他1985	9	若狭ヤキノ窯跡	石川県 高松町	8C後半 ～9C	C類	西野他1985
4	横江庄遺跡	石川県 能登市	9C	A類	古井他1983	10	小杉流通業務団地内 No16遺跡	富山市 小杉町	8C前半	D類	上野他1986
5	笠打のや窯跡	石川県 高橋町	9C	A類	平野他1976 田中1988のシンボジウム解説文 では眞として認定している	11	戸塚若宮遺跡	滋賀県 守山市	8C～9C	D類	上野1994
6	寺家遺跡	石川県 羽咋市		B類	小畠他1988	12	小杉流通業務団地内 No16～B窯跡	富山市 大手町	8C前半	D類	上野他1982
						13	黒河尺目遺跡	滋賀県 守山市	8C中葉	E類	本吉

表2 奈良・平安時代の土器一覧



第19図 奈良・平安時代の土器 (分類)

は2個一対の小穴を2箇所につける。おそらく底に目皿状のものを敷くために紐や棒を通した補助的な小穴ではないかと思われる。

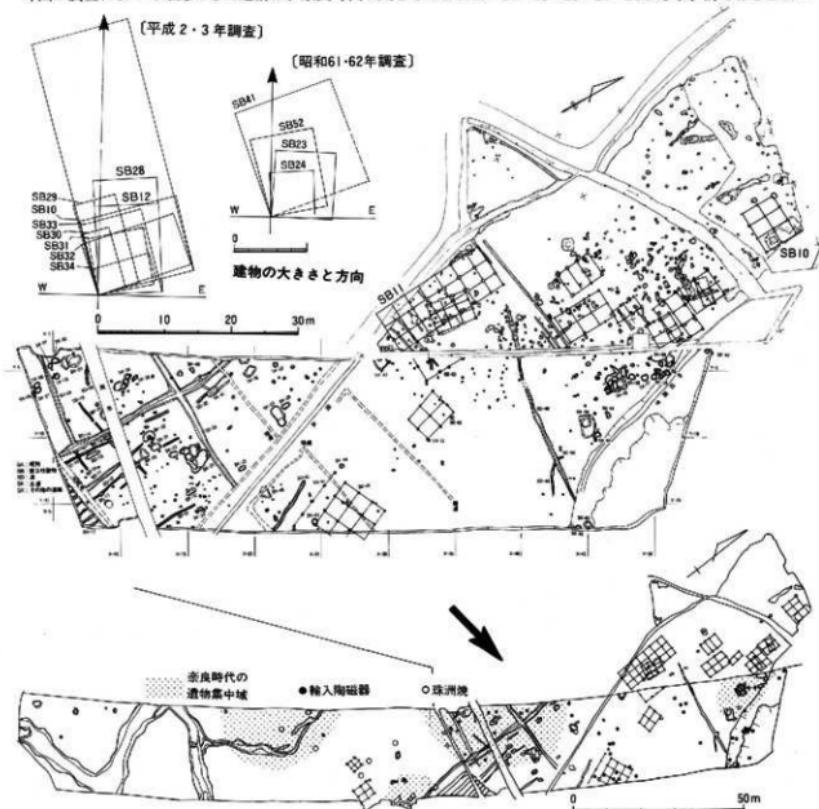
D類の10~13は底部側の端部に分厚い鉢状の粘土帯をめぐらせたものである。断面の形態はB・Cを合成したよう肥厚させている。使用する状態は、A・B類（5を除く）が甕の内面の頸部にはまるのに対し、C類は下にくる甕の口縁部から頸部にかけてのせる状態であり、D類は下に置く煮沸土器の上にのせて使用したのではないかと想定される。13は土器底部の形態がD類であり、その内底面に更に低い円筒部と側面に小穴を1つ設けたもので、機能は概とと考えたいが用途は不明であり、今後の類例の増加がまたれる。

(2) 平安時代末から鎌倉時代

この遺物は、SB11、SK13・18などから出土している。土師質土器は底部に糸切り痕をもつもので、珠洲編年のI期頃に伴うものである。珠洲のいわゆる摺鉢は調査区から149・150からII期頃のものがあり、青磁は龍泉窯系の皿と碗の割画文碗がみられ、12世紀後半から13世紀中葉にあたる。

2、遺構について

今回の調査によって確認できた遺構は、奈良時代の穴としてSK02・04・16・23・24・26があり、溝ではSD10・



第20図 遺跡の検出遺構

25の一部がある。いずれも点在して存在している遺構及び遺物の集中箇所はみられない。S K02・04・23からは、鉄岸・炉壁・タイルの羽口が出土しており、また調査区全体から鉄滓がみつかっていて、遺構の性格は明らかでないがこれまでの調査でも把握されているように、製鉄に関連した遺跡である。

掘立柱建物は、平成3年の調査によって9棟が確認された。時期はSB11・12以外は出土遺物もなく時期の特定ができない。建物の柱間は、最大は3×8間の平面積約125.6m²から、最小は1×2間の平面積約7.6m²までと開きがある。建物の重複は、SB11とSB12、SB28とSB30、SB31とSB22、SB33とSB34の4箇所で認められて、少なくとも2回の重なりである。また、建物の主軸方位は、SB10・11・29～31が西偏約12°～17°までの幅に収まり、中でも15°前後が多い。SB10・32・33は、SB11などとは建物方向が南北棟と東西棟の関係から角度が90°異なる。SB12・28は西偏4°と真北に近く、9棟の建物は、大きく二つの方向が存在している。

しかし、調査地では、建物方向の少し異なるSB11・12と柱穴から出土した遺物から建物の時期が12世紀後半から13世紀前半にかけてにあたり、その期間に重複して建てられている。また、遺構の切合からSB10は、大まかに8世紀後半から9世紀前半に相当し、SB11などと90°異なる。時期の特定できない建物が方位から構築時期を推定するには今回での調査結果から無理があると思われる。

既往の調査では、奈良時代と中世の掘立柱建物が合わせて4棟が検出されているが、建物の掘り方や柱穴の残存状況に大差がみられず、SB28～34の構築時期は、周辺の遺物の出土状態や既存の調査から、下限の時期が13～14世紀に収まるものであろう。

引用・参考文献

- イ 池野正男・宮田進一 1986 「石名山窯跡発掘調査報告」 大門町教育委員会
上野 章・狩野 睦 1982 「3. №18遺跡C地区」 富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第3・4次緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会
上野 章・池野正男・関清・松島吉信 1986 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第8次緊急発掘調査概要—№18遺跡B地区・№19遺跡—」 富山県教育委員会
上野 章 1992 「小杉町戸破若宮遺跡」 小杉町教育委員会
宇野隆夫・春日真実・田中道子他 1988 「越中上末窯」 富山大学人文学部考古学研究室
キ 北林吉弘 1959 「歴史の舞台としての自然」 『小杉町史』 小杉町
岸木雅敏・関清他 1987 「都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要5—黒河尺目遺跡」 富山県教育委員会
小嶋芳孝他 1988 「寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ」 石川県立埋蔵文化財センター
関清・安念幹倫他 1988 「都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要6—黒河尺目遺跡」 富山県教育委員会
タ 田嶋明人 1988 「古代土器編年輪の設定」「シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題」 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
西野秀和・澁井 貞・本田秀生・平田天秋 1985 「高松町岩縁ヤキノ窯跡」 石川県高松町教育委員会
ヒ 平田天秋他 1976 「高松町真打・みやの古窯」 石川県教育委員会・みのや古窯跡発掘調査委員会・石川考古学研究会
○ 宮田進一・久々忠義 1982 「(4) 集落区域の遺構」 富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第3・4次緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会
ヨ 吉岡康暢 1966 「輪島市の考古学的調査 第1報 龍舟古窯址・洲衛古窯址群」「石川考古学研究会会誌」 第10号 石川考古学研究会
吉岡康暢 1989 「珠洲の名陶」 珠洲資料館

図版第1

平成2年調査

(北地区)



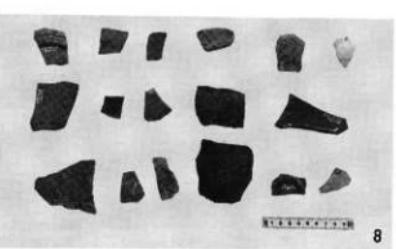
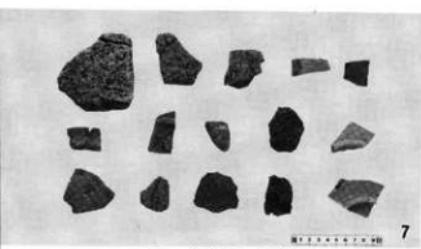
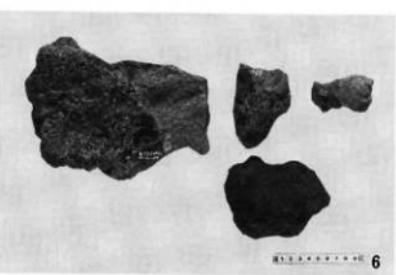
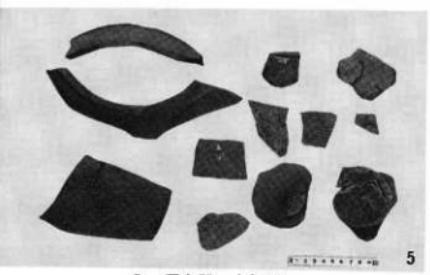
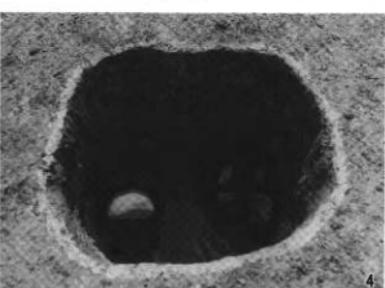
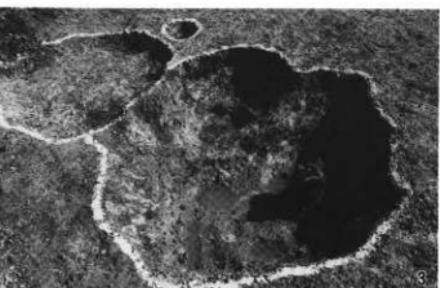
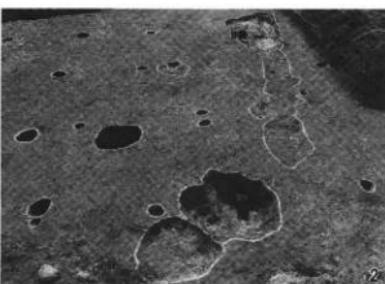
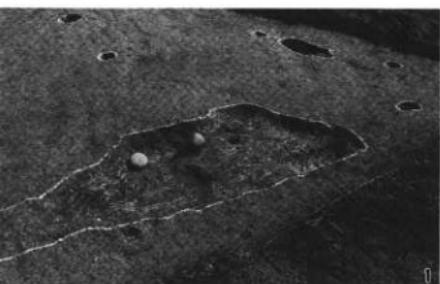
1. 調査区全景 東から



2. SK08・SB10 北から

平成2年調査

北地区



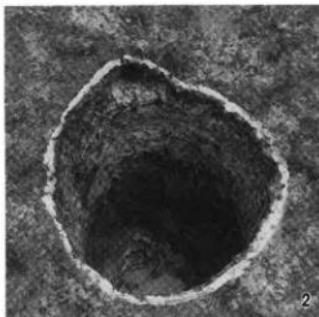
図版第3

平成3年調査

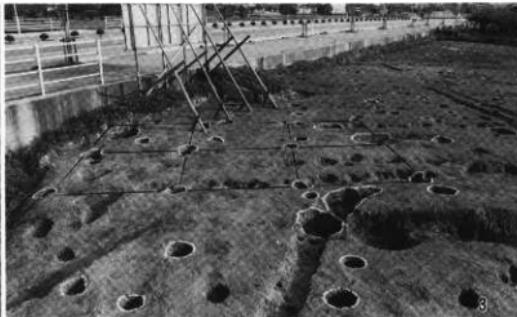
南地区



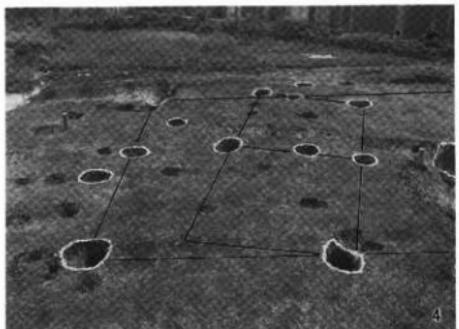
調査区近景（北から）



SK18



SB32（北から）



4

SB33・34（西から）

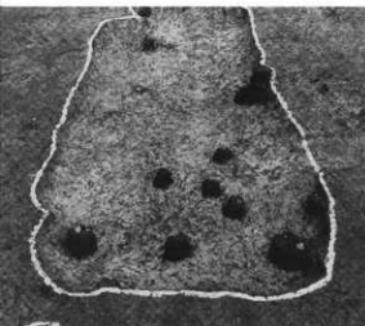


5

X25～31 Y6～15（東から）



調査区近景・SB11（南から）



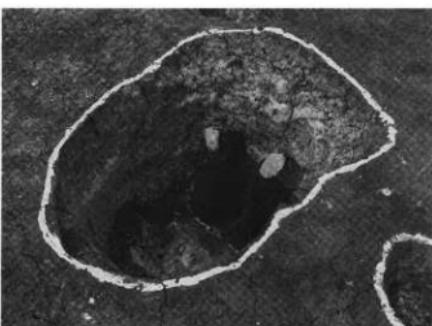
SK13（南から）



SB11（北から）



SK16（南から）



SK15

図版第5

平成3年調査



SK23 遺物出土状況



同 左



SD10 遺物出土状況



SK23 完掘



1



2A



3



2B

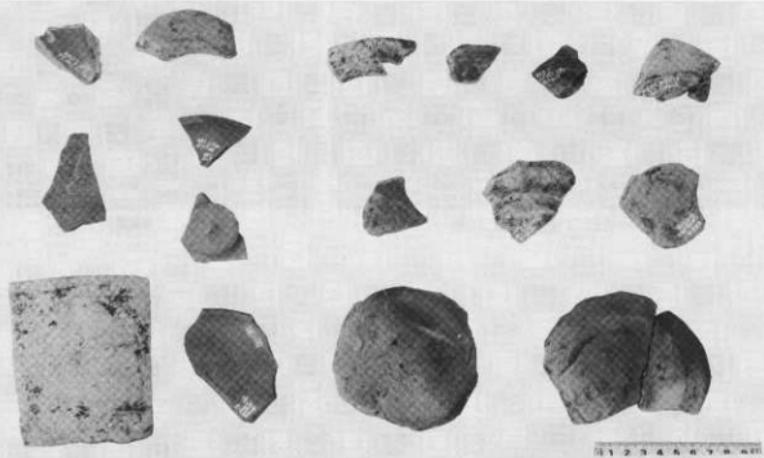
3B; S= $\frac{1}{2.6}$ 1-3; SK23出土

図版第6

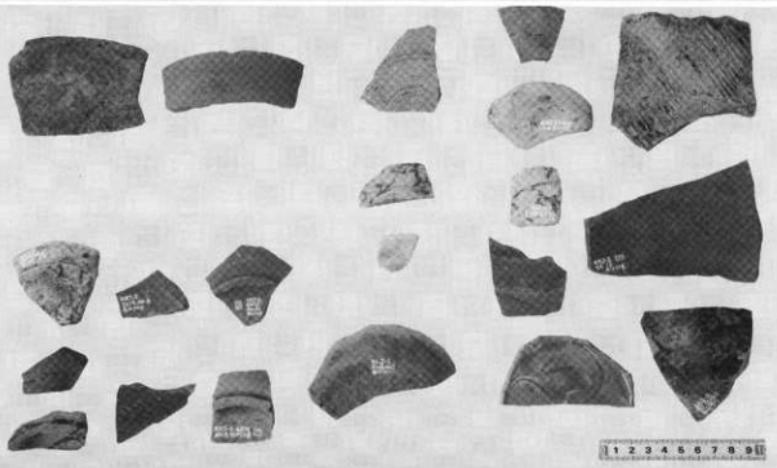
平成3年調査
出土遺物



SK23



左:青磁
須恵器
右:土師器



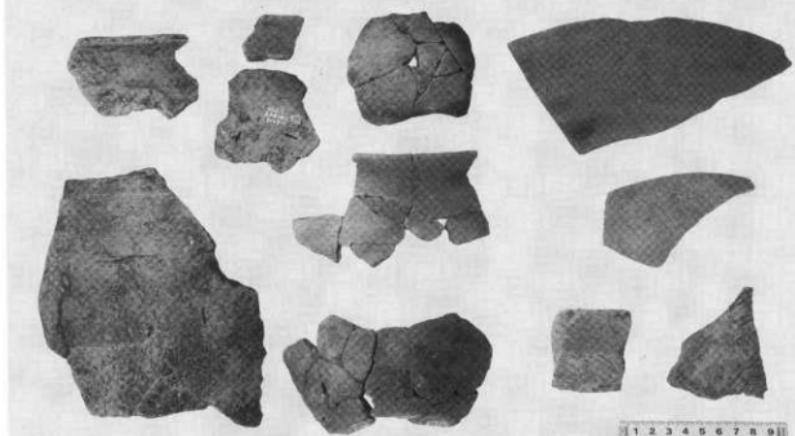
左下:SK13
左中:SK16
右:SK18

約1:3

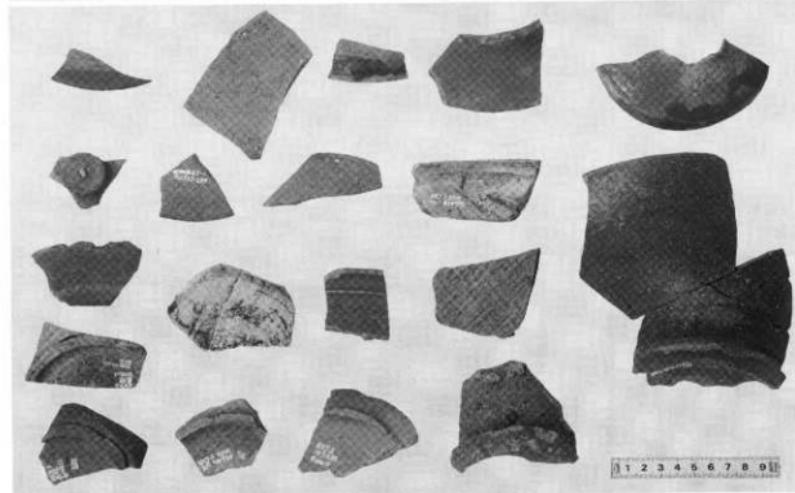
図版第7

平成3年調査
出土遺物

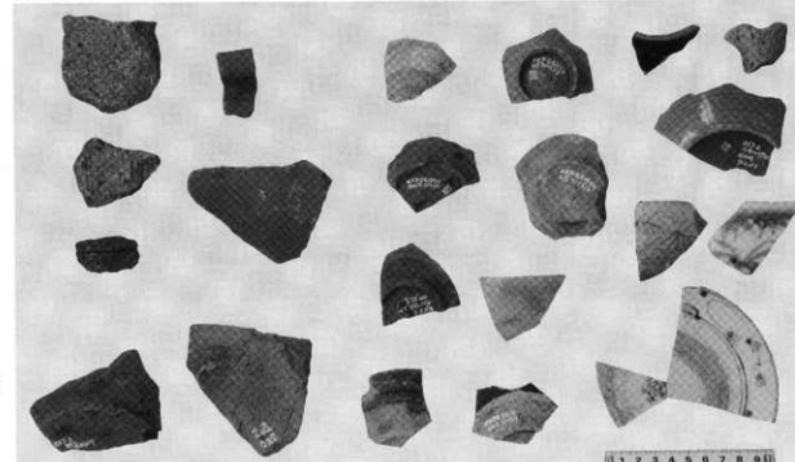
左:土師器
右:珠洲・須恵器



須恵器



左:石斧・珠洲
右:近世陶磁器



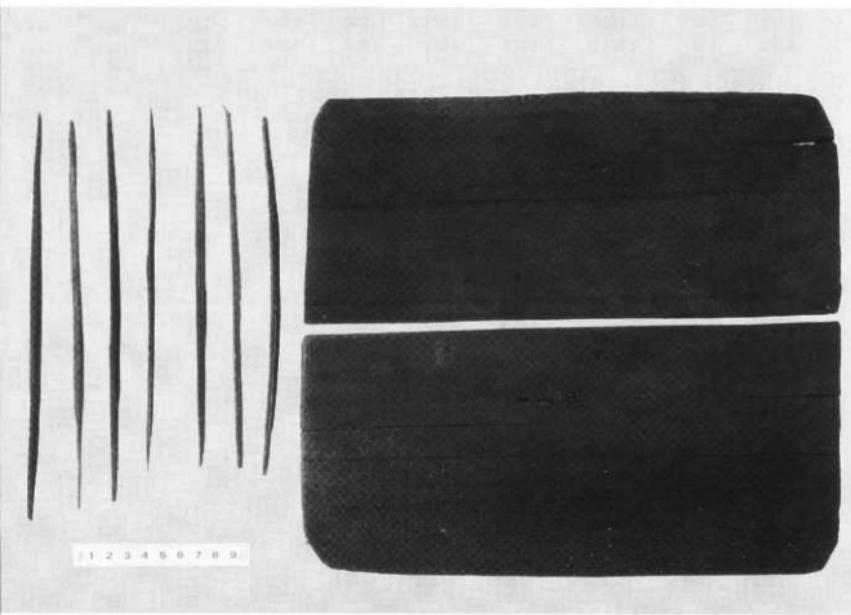
約1:3

図版第 8

平成 3 年調査
出土遺物



SK18
木製品



SK18
木製品

約1:3

小杉町黒河尺目遺跡発掘調査概要

平成4年3月

編集 小杉町教育委員会

発行 富山県射水郡小杉町戸破1511

〒939-03 電話 (0766)56-1511

印刷 口興印刷株式会社
